

多治見図書館での実習を終えて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学司書・司書教諭課程 公開日: 2018-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳井, 孝太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19467

多治見市図書館での実習を終えて

教養デザイン研究科 博士前期課程2年
柳井 孝太

実習先：多治見市図書館（岐阜県）
実習期間：2017年8月2日～8月17日（14日間）

はじめに

岐阜県多治見市は、岐阜県の南部に位置しており美濃焼の産地として有名である。名古屋市へのアクセスも良く、ベッドタウンとして発展してきた。人口は112,195人（2017年6月1日）である。

多治見市の図書館ネットワークは、多治見市図書館（本館）、子ども情報センター（児童向け）、笠原分館（合併により笠原中央公民館図書室より改名）の3館体制となっている。運営は指定管理者制度により、多治見市文化振興事業団が受託している。また、各地域に設置している8つの公民館と交流センター内に設置されている図書室もアクセスポイントとなっている。

私は、8月2日から17日までの14日間、本館で実習を行った。本館は地上7階、地下2階建ての複合施設の中にある。図書館は地下1・2階の書庫と2・3階の開架閲覧室からなる。それ以外のフロアは、ヤマカまなびパーク 多治見市学習館として運営されており、学習室・陶芸室・音楽室・和室などの設備を備えている。図1は、2階のフロアマップである。2階には、絵本・児童図書・ヤングアダルト・一般図書（家政学・文学）が排架されている。図2は、3階フロアマップである。主に一般図書、郷土資料、陶磁器関連資料、医療情報コーナー・闘病記文庫、英語多読コーナーなどがある。他にも無線LAN、図書除菌機、利用者検索機等の設備も備えられている。

2階

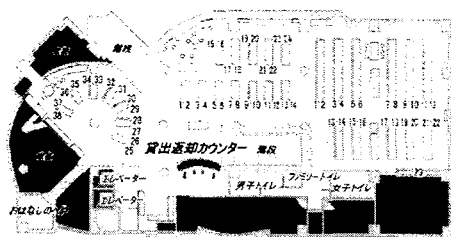


図1：本館2階フロアマップ

3階

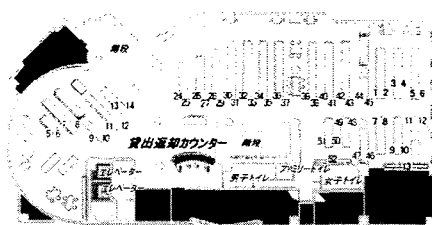


図2：本館3階フロアマップ

実習内容

8月2日（水）

午前：館内見学・返本作業

午後：修理本返却（根本交流センター）

団体貸出（北稜中学校）

午前中は館内を一通り見学した。小・中・高と何度も利用していた図書館であったが、大学生になってからは足が遠のいていた。司書課程での学びの成果もあり、様々な発見があった。その後は、返本作業を行いながら、書架の把握に努めた。午後は、公民館や中学校への本の運搬に同行した。

この日の実習で最も驚いたのが、「文庫本の排架方法」である。明治大学図書館では、新潮

文庫、文春文庫、講談社文庫といった出版社ごとに排架されている。だが、多治見市図書館では、出版社ではなく、著者ごとに分類が行われていた。一人の作者の著作が、出版社の垣根を飛び越え一か所に集められているのである。更に著名な著者については見出し（フラッグ）が用意されており、利便性の高い排架方法だと感じた。

しかし、返本作業を行う側としては、五十音順とフラッグの有無を意識しながらの作業となり、非常に集中力を必要とした。また、書架の狭隘化が進み、本が中々収まらないということも度々あった。その都度、パズルのように前後の本をスライドさせる必要があり、時間を取られてしまった。

8月3日（木）

午前：新聞装備・新着本登録・配架

午後：ブッカー貼り

午前中はまず、新聞装備を行った。単に新聞を設置すれば終わりではない。盗難防止のためスタンプを6か所に押印し、数独やナンプレ、割引券にはブッカーをかけるという作業が必要であった。

また、新聞は一定期間が経過すると廃棄されるが、中日新聞東濃版と朝日新聞岐阜版は永久保存されるということであった。

次に新着本の登録作業を体験した。本館には一週間ごとに100冊前後の新刊が届くという。日々出版される膨大な量の本の中から、選書するのは司書のセンスが問われると感じた。また、選書・装備の段階においてTRC（図書館流通センター）のサポートは欠かせないと痛感した。選書段階では、『週刊 新刊全点案内』が活用されていた。分類番号・件名が付与された新刊のリストがずらりと掲載されており、作業の大幅な効率化ができると感じた。そして発注した本は、TRCによって背ラベル、バーコード・ラベルを貼付、コーティングされた状態で納入されていた。公共図書館におけるTRCの存在に驚かされた。

午後は、ブッカー貼りを行った。前述のよう

に基本的にはTRCでコーティングがなされている。だが、寄贈の本や弁償の本には独自にブッカーをかける必要がある。ブッカー貼りの経験は一度しかなく、非常に不安であった。しかし、懇切丁寧に指導していただき、何とか綺麗に貼り終えることができた。

8月4日（金）

午前：返本作業、郷土資料室見学

午後：寄贈本の引き取り・整理

午前中は、郷土資料室を見学した。郷土資料室の元は、多治見市史の編集室だという。郷土資料室では、時代を問わず地域資料の収集が行われていた。高齢者への聞き取り調査などを実施したり、地元広報誌に資料提供を行うこともあるという。

午後は、寄贈本の引き取り作業に同行した。亡くなった夫の蔵書を引き取ってほしいという奥様からの依頼であった。猛暑やゲリラ豪雨に見舞われつつも、陶磁器関連の図録などの貴重な資料を引き取ることができた。多治見市図書館は、Library of the Year 2015において、こうした「司書が足で稼ぐ」収集活動が評価され大賞を受賞している¹。単に本が入荷するのを待つだけでなく、司書自らが積極的に動くことの重要性を体験できたのは、本当に大きな収穫であった。日頃から市民に信頼されているからこそ、寄贈の申し出があるのだと感じた。

8月5日（土）

午前：返本作業

午後：手作り絵本講座 参加

午前中は、返本作業と在架予約資料の確保を行った。予約された本は速やかに書架からピックアップしなければならない。だが、これが意外に難しい作業であった。図3は、明治大学図書館の請求記号の例である。受入順記号を採用しているため、非常に単純である。書架を端から眺めていけば、容易に目的の本を発見するこ

1 IRI 知的資源イニシアティブ

<http://www.iri-net.org/loy/loy2015.html>

(2017年12月5日閲覧)

とができる。

913.6【分類記号】
56 【受入順記号】
H 【所蔵館】

図3 明治大学図書館の請求記号

ところが、多治見市図書館では著者記号を採用している。そのため、請求記号は図4のようになり、五十音順で著者名を探していかなければならない。更に、小説に関しては著者名から探すことを考慮して五十音順の排架が徹底されている一方、その他の本については五十音順が努力目標となっているのである。つまり、分類記号が同じ本をすべて確認する必要が生じるのである。この点には非常に苦労した。

913.6【分類記号】
ヤナ【著者記号】

図4 多治見市図書館の請求記号

午後は、手作り絵本の会が主催する「ぼくも私も絵本作家」（13：30～15：30）という講座に参加した。図書館利用者を増やすためには、こうしたイベントの企画も重要な仕事であると感じた。

8月6日（日）

午前：返本作業

午後：ブッカー貼り

この日は、午前中に返本作業、午後にブッカー貼りを行った。実習も5日目となり、ようやく迷わずに返本作業が行えるようになりつつあった。2階には、大きく分けて絵本・児童書・ヤングアダルト・一般図書という4つの区

分けが存在し、それぞれが独立した排架となっている。そのため書架の配置の複雑さは大学図書館の比ではない。

この日、混乱してしまったのが絵本の排架であった。絵本だけは子どもが利用しやすいようにタイトルの五十音順で配架されている。だが時折、「かこさとし」や「せなけいこ」といった人名で配架されている場合もある。また、「ばばあちゃん」、「ひとまねこざる」、「14匹のねずみ」、「11匹のねこ」といしりズ名で配架されるケースもあった。更に恐竜が登場する絵本はすべて「きょうりゅう」として「き」の書架に配架されていた。

こうした措置は、子どもや保護者が絵本を探す際の利便性を最大限考慮したものである。だが、絵本と疎遠となった私にとっては一筋縄ではいかず、難しい作業であった。

8月8日（火）

午前：返本作業

午後：貸出資料の配送

（子ども情報センター・笠原分館）

多治見市図書館は、月曜日が休館日である。そのため、火曜日の朝の返却ポストには本がうず高く積まれていた。それらの本をフロアごとに仕分けして、ブックトラックでカウンターに持ち帰らなければならない。そのうえで返却処理を行うのだが、書架に戻す本、分館に戻す本、予約本など様々な種類に分ける必要があり、難しかった。また、ここで確実に返却処理をしなければ、様々な問題が生じるため、複数人によるダブルチェックが実施されていた。素早く作業を行うためには、熟練の技が必要だと感じた。最近では、ICタグを利用した自動返却仕分機が登場しており、こうした機器もいずれ導入されるのではないかと感じた。

午後には、分館である子ども情報センター、笠原分館への配送作業を行った。複数館の蔵書を相互に貸し出し返却可能なシステムは便利な反面、スタッフによる手間暇がかけられていることを痛感した。

8月9日（水）

午前：返本作業

午後：ブックスタート

この日はブックスタートを体験できるという貴重な機会に恵まれた。多治見市のブックスタートでは、保健センターで行われる4ヶ月児健診を受診する親子を対象に絵本を一冊プレゼントしている。保健師による問診、集団指導（生活リズム・離乳食）、身体測定、診察、保健相談に続いて絵本のプレゼントが行われた。各種案内の詰まった袋も同時に手渡すことで、親子ともに図書館の利用者にしようという意気込みを感じた。本は2年ごとに入れ替え。兄弟で被らないようにするという配慮もされていた。今年度は『くだもの』、『ちょうちょひらひら』、『ごぶごぶごぼごぼ』の3冊から1冊を選ぶことができた。

8月10日（木）

午前：おはなしの会 読み聞かせ

午後：除籍本整理

多治見市図書館では、ブックスタートのフォローアップ事業として、「お母さんと赤ちゃんのためのおはなし会」が月2回開催されている。職員とボランティアの方が協力して、全体への読み聞かせと手遊びが行われた。私は、絵本を5冊選書して、個別の読み聞かせを担当させていただいた。実際に乳幼児に読み聞かせを行うのは初めてであり、非常に緊張したが、喜んでもらうことができた。

8月11日（金）

午前：返本作業

午後：返本作業

この日は、初めて大活字本の返本作業をおこなった。大活字本を手取るのは初めてであり、非常に感動した。字が大きくて読みやすく、高齢者への需要もあるのではないかと感じた。また、拡大読書器や自動活字読み上げ機の実物も見学した。

8月12日（土）

午前：返本作業、予約資料確保

午後：「指定管理者制度」説明

実習10日目ということで、「指定管理者制度」に関するレクチャーを受けた。多治見市図書館は、公益財団法人多治見市文化振興事業団²に運営が委託されている。カウンター業務の委託から始まり、2006年から全面的に運営を担っているという。5年ごとに更新があり、契約を更新できない可能性もある。多治見市の総合計画や条例、仕様書に沿えるかが大事とのことであった。また、主な評価基準の一つが「貸出冊数」であるという話も衝撃的であった。市の人口が次第に減少する中、貸出冊数を維持しているのは、職員一人一人の創意工夫の結果であると感じた。

ブックディテクションシステム（BDS）がないため、本の盗難を防止できないという話を聞き、残念に感じた。図書館には2階・3階で合計6カ所に入出口が存在する。このため、予算的にBDSを設置することができないとのことであった。人気の漫画本などは地下書庫に置くことで、盗難を防いでいるということだった。

8月13日（日）

午前：「障害者サービス」説明

午後：「おすすめ本」展示準備、返本作業

午前中は障害者サービスについての説明を受けた。FAXで相互に依頼を行うことで、全国で資料の相互貸借を行っているとのことであった。月に40件ほどの利用があるという。地元出身の歴史小説家である高橋和島の作品を多数所蔵しており、全国から依頼が来るとのことだった。資料の作成については、ボランティア団体である多治見アイ・パートナーの会の協力を受けているようだ。点字テプラやPLETALK（DAISY専用の機器）の実物を初めて見た。

午後は、初めて3階の返本作業を担当した。利用者は2階が圧倒的に多い。3階は非常に静寂な雰囲気であった。驚かされたのは「新書」

2 図書館の他にも公民館・文化会館・総合体育館・学童保育所等の施設を受託している。

の排架である。新書といえば、岩波新書や講談社現代新書といったシリーズで番号順に並べるものだという思い込みがあった。多治見市図書館では、新書は独立した排架とはしているものの、出版社混在でNDCに沿って分類を行っていた。最初は非常に違和感があったが、慣れてくると合理的だと感じるようになった。

8月15日（火）

午前：返本作業

午後：「英語多読コーナー」説明

午後は、「英語多読コーナー」の説明を受けた。英語多読コーナーは2014年9月に新設されたコーナーである。今まで「英語多読」という概念すら知らなかったもので、勉強になった。

端的に言えば英語多読とは、①辞書はひかない、②わからないところは飛ばす、③つまらなくなったらやめるという多読三原則を守りながら、自分に合った英語の本からどんどん読んでいくというものだと理解した。多治見多読を楽しむ会（TTT）という団体も活動しており、図書館を拠点として英語多読が実践されている様子が伺えた。本には、請求記号とは別に、裏面にシリーズレベル・YL（読みやすさレベル）・総語数が記載されていた。また、図書館ホームページ上には、ブックリストが公開されており、利用者が自分の読書履歴を記録できる仕組みも用意されていた。英語多読には打ってつけの環境であると感じた。

8月16日（水）

午前：新聞装備、おすすめ本展示準備

午後：「医療・健康情報コーナー」説明

医療・健康情報コーナーの意味や役割について学んだ。多治見市図書館は、岐阜県立多治見病院患者図書室「ぬくた～らいぶらり」と連携関係にあり、各種パンフレットなどが準備されている。また、科学的根拠に欠ける部分もある

との理由で、患者図書室には置けない闘病記を集めた「闘病記文庫」も設置されている。闘病記は個人の体験を中心としたもので、患者の心の支えとなると感じた。闘病記は病名ごとに細かく分類されており、利用者の方が誰にも事情を話さなくても探せる工夫が施されていた。他にも、NDCの枠を超えて介護に関する本を集めた「家庭介護コーナー」や、子供の成長に関する本を集めた「鈴と小鳥文庫」なども設置されていた。「病院に行く人だけが病人ではない」という担当司書の方の言葉が印象に残った。

8月17日（木）

午前：「陶磁器資料コーナー」説明

午後：「家政学コーナー」説明

実習最終日は館内整理日であり、比較的時間に余裕があったため、多くの司書の方からお話を伺うことができた。午前中は、「陶磁器資料コーナー」についての説明を受けた。多治見市は美濃焼の産地である。そのため、ビジネス支援・産業支援として陶磁器に関する様々なコレクションを備えている。ここで感動したのは、本の排架方法である。NDCだけでは、膨大な陶磁器に関する本を適切に分類することができない。そこで、NDCを生かしつつも、「陶芸論」、「陶芸家論」、「陶芸技法」、「陶芸入門」などの独自の分類が構築されていたのである。また、コレクションは書籍にとどまらない。パンフレットや図録などの灰色文献も積極的に収集されていた。前述のように寄贈を受け取りに行ったり、展覧会の情報をこまめにチェックして購入依頼をしているという。地域に根差した素晴らしいコーナーであった。

おわりに

実習中は大変だと思うこともあったが、本当にあつという間の実習だった。本当に多くのことを学ばせていただき、心から感謝申し上げたい。